

宇和盆地、二つの薬師堂と  
笠置越え

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
近代化遺産活用アドバイザー



薬師堂

宇和盆地には、かつて近郷近在から多くの善男善女が詣でた山田薬師がある。日本三大薬師というのは何通りかあるのだが、こちらもその一つ。由緒としては、平安期の白河法王時代、勅願寺として出雲の一畑(薬師)・筑後(久留米)の永勝寺と共に日本三薬師と称



山門の仁王(阿像)

せられた。寺伝では行基菩薩の開基ということになっており、開基千三百年に当たる平成26年には、50年に一度の大祭も催された。毎年、お釈迦様の誕生日である4月8日には、「花祭り」の縁日があり、盛時の華やかさにははるかに及ばないが、今も参道には露天商も出る。かつての喧騒を現代的に比較すれば、松山市の風物詩「椿さん」にも匹敵するだろうか。モーターリゼーションが普及する前、八幡浜からは笠置峠を越え、三瓶からは鳥附峠を越え、明浜からも根笹越えで西山田へと人々はこぞって参集したのだった。本尊の薬師如来は、災禍や病苦から衆生を救済する仏であるので、日々の暮らしを無病息災にと願う素朴な庶民感情には人気がある。



山門と伊達家家紋「竹に雀」

昭和38年の夏、大雨の後、大音響とともに裏山から落下した大岩は、境内にあった15坪ばかりの大薬師堂を一瞬の内に下敷きにした。たまたま夏休み帰省中の小学生だった筆者は居住が近くだったのでよく記憶している。本当にベツチャンコ、今にして思えば岩の下に堂宇の根太(基礎の梁材)と思いき木材に丁度乗っかる形でそれは座っていた。しかも後で聞けば、観音扉になっていたお堂の背中から押されたものか、お大師様はそのまま無傷で外に飛び出て難を逃れていたのだった。その年は今に語り継がれる「三八豪雪」のあった冬を越しての夏の災禍だったので、きつと地盤がゆるんだ所へ大雨となり、ひとたまりもなくそんな自然現象が出現したのに違いない。加えて、偶然にも翌年が千二五十年祭のタイミングでもあり、それに間に合わせる形で大薬師堂が再建されたのは、この地区の信仰心の賜物。



千三百年祭の人々と大岩

イルの有  
難い薬師  
如来が拝  
観出来る  
ので、多  
くの方に  
お参りに  
来て頂き  
たいもの  
である。  
参道にあ  
る各民家  
の佇まい  
も、現代  
的には奇  
跡的にか  
つての伝  
統文化を  
色濃く残  
した景観  
が見事で  
、めっき  
り少なくな  
った障子  
の白さも  
目にまば  
ゆい。こ  
の地区の  
長年にわ  
たる薬師  
参詣の方  
々々へお  
もてなし  
文化が伝  
えられて  
いるから  
こそその  
庭の手入  
れと建物  
の維持で  
ある。昔  
は4月8  
日に合わ  
せて障子  
を張り替  
え庭を整  
えるのが  
、この地  
の当たり  
前の生活  
習慣とし  
てあった  
。流石に  
それは次  
第に難し  
くなくな  
っている  
が、それ  
でも参道  
集落の凛  
とした雰  
囲気には  
今なお品  
格ある景  
観が垣間  
見られる  
。

もう一つの薬師堂についてもご紹介



花まつりの花御堂



須弥壇と天井画の八方睨みの龍



薬師如来

薬師である。今となつては山田薬師以上に全く知られていないが、かつての薬師参拝はこの二つの像に詣でるのがセオリーだった。特に八幡浜周辺の方々にとつては、若山地区にある釜倉の出店を経て、昨年国史跡となった笠置古道を登り、笠置峠から下ると岩木地区へというルートなので、笠置薬師は必須の立ち寄り先でもあった。両方にお参りしてこそその現世利益となる。しかも、初めて笠置薬師を訪れる人はきつと驚くに違いない。扉が開くといきなり目に飛び込んでくる夥しい数の笠、笠、傘、傘。道理で笠置薬師という名前のハズだ、とは思ふものの、次にナンデ？と思わずにいられない。地元の古老に聞くと、どうやら願掛けにお参りに来てそれが成就すると、お札に笠を置く習慣がいつの頃からか習わしとなっていたのだとか。昔の記憶では峠にも傘が突き立ててあったと証言する人も。つまりは、笠を置くから「笠置峠」。そうして旅の安全を祈願したのでろうか。行政区名も、戦前期には旧笠置



笠薬師内部

村と山田村が合併して石城村になり、それが宇和町となり西予市へと変遷した歴史経緯がある。それにして、菅笠のみならず、帽子やパラソルまで、ここはまるで笠の民俗資料館の趣きである。



笠薬師